

「心に刻むべきもの」  
申命記 6章 4-15節

三位一体主日に与えられた御言葉は、イスラエルの信仰の土台であり、主イエスも「第一の戒め」とされた「シェマー（聞け）」と呼ばれる重要な箇所です。信仰の出発点は、人間の熱心さや行いではなく、まず神の言葉を「聴く」ことにあります。神の呼びかけに続く「心を尽くし、魂を尽くし、力を尽くして、あなたの神、主を愛しなさい」という言葉こそ、神との関係を大切に生きる信仰の本質です。

ここで求められている主への愛には、抽象的な概念ではなく、具体的な日常の歩みが含まれています。「心を尽くして」とは、単なる感情ではなく、人間の考えや判断、意思の中心を神に向けることです。人生の岐路や葛藤の中で「神は何を喜ばれるか」「イエス様ならどうなさるか」を基準に生きることを指します。

「魂を尽くして」とは、神の息を吹き込まれて生かされている命そのものを表します。人生の喜びも悲しみも、希望も不安もすべてを神の御手に委ね、「私の人生は神のもの」と告白して歩むことです。

「力を尽くして」とは、特別な偉業ではなく、家庭や職場などの日常の具体的な行動（言葉、態度、時間やお金の使い方）において神への愛を表現することです。神が喜ばれるのは完璧な成績ではなく、神へと向かう心そのものです。

しかし私たちは、この大切な神を簡単に忘れてしまう弱さを持っています。特に苦難の時よりも、不自由のない「豊かな時」ほど、恵みを当然と錯覚し、自分の力で手に入れたかのように誤解して神を忘れてしまいがちです。私たちは日々、世の価値観や不安、否定的な声など様々な言葉を聞いていますが、本当に私たちを支えるのは神の約束の言葉です。だからこそ聖書は、御言葉を繰り返し教え、日々のあらゆる場面で語り、心に刻み続けよと命じます。私たちが礼拝を守り、聖書や祈りに親しむのは、私たちが何度でも神の愛を思い起こすためです。そのようにして心に深く刻まれた御言葉は、やがて隣人への誠実な態度や歩みそのものへと変わっていきます。

それでもなお、私たちは自分中心に生き、神を愛しきれない現実と直面します。だからこそ、私たちにはイエス・キリストが必要です。イエス様はこの戒めを完全に生き抜き、ゲツセマネの園での苦しみの中でも父に従われ、十字架において命を捧げられました。私たちが愛しきれないその罪のただ中で、私たちの代わりに神を愛し、私たちを愛し抜いてくださったのです。

それゆえ、私たちの信仰は「頑張って神を愛さなければならない」という義務から始まるものではありません。「こんな私が圧倒的に愛されている」という真実から始まります。私たちは愛され、赦された者だからこそ神に向かうのであり、私たちの信仰は、私たち自身の愛の強さではなく、神の愛の確かさによって支えられているのです。

「聞け、イスラエル。」まず聞き、その言葉を心に刻みましょう。父なる神の慈しみ、十字架のキリスト、今も内に住み働かれる聖霊。この三位一体の神の福音こそ、私たちが何よりも心に刻むべきものです。この確かな約束に支えられ、今週も神を愛し、共に歩んでいきましょう。